### 専修大学スポーツ研究所公開シンポジウム2019報告
### スポーツレガシーシリーズ Vol.12

# 「日本基準」から「世界基準」へ

2019年11月21日(木) 13:05～16:20（3、4限）
会場：専修大学生田キャンパス10号館10301教室

**開会の挨拶**
**佐竹 弘靖**（専修大学スポーツ研究所 所長・ネットワーク情報学部教授）

総合司会：**飯田 義明**（経済学部教授）

**飯田**　ただいまから、スポーツ研究所創設50周年記念のシンポジウムを行います。シンポジウムは第一部、第二部の構成で、３限と４限を使って行うことになっており、内容は異なります。長丁場になりますが、お付き合いいただければと思います。

今年度のテーマは、手元の資料やポスターで確認できると思いますが、「日本基準から世界基準へ」ということで、様々な分野でご活躍されている方々をシンポジストにお迎えしております。特に、先日行われたラグビーワールドカップ日本大会では、今までラグビーを見たことがない、あまり興味がなかったという学生も多かったと思いますが、日本国内で大きな盛り上がりを見せました。日本のスポーツの新しい可能性を感じさせてくれたのではないかと思います。また、来年は2020東京オリンピック・パラリンピックがやって来ます。スポーツが非常に注目されている昨今、日本はスポーツをどういうふうに捉え、評価してきたのか。今日はそのあたりをメインにお話をしてもらいたいと思います。

特に一部では「ハイパフォーマンス」という言葉をキーワードに議論を展開していきます。ハイパフォーマンスとは、世界最高峰の舞台において求められる競技力です。日本国内での勝った負けたではなく、世界にいかに通用するのか、世界でいかに勝てるのか。僕はサッカーをやっていますが、残念ながら先般の代表戦を見て、オリンピック代表が、世界と大きな差があることを痛感しました。

総合司会：飯田義明

ただ、今日お越しいただいている卓球は、日本と中国の一騎討ちになるのではないかというぐらい、世界のトップの戦いをしております。そしてラグビーは、先般日本中を熱狂の渦に巻き込んでくれたと思います。そしてバレーボール、お家芸ですね。各分野でいま活躍されている方々をシンポジストとして招き、世界最高峰はどうなっているのかをこれから聞いていきたいと思います。

それでは、ここで研究所の所長である佐竹からご挨拶をいただきます。

**佐竹**　皆さん、こんにちは。ただいまご紹介賜りました専修大学スポーツ研究所所長の佐竹でございます。本日は非常にご多忙の中、これだけの大人数の方に参加していただき、心より御礼申し上げます。いま飯田先生から諸々お話がありましたが、はじめに「日本基準から世界基準へ」というタイトルの上に記載してある「専修大学スポーツ研究所50周年記念」ということについて、皆さん方はご存じないと思いますので、ほんの少しお話をさせていただきたいと思います。専修大学スポーツ研究所の発足は、1969年でございます。専修大学社会体育研究会という形で発足しました。本年、専修大学は、新制大学になって70年を迎えますが、専修大学が新制大学になってから20年後の1969年に、専修大学社会体育研究会が発足しました。その５年前の1964年は、第18回東京オリンピックが開催された年です。その５年の間に、日本の社会体育というものをこれから発展させていかなければいけないということで、研究会が発足しました。その後、1972年になりまして、専修大学社会体育研究所という形で設立され、2013年に現在の専修大学スポーツ研究所と改称し、今に至っております。従って、専修大学のスポーツ関係というのは、50年の歴史を持っているということをご理解いただきたいと思います。その50年を迎える記念の年に、今回「日本基準から世界基準へ」というタイトルのもと、シンポジウムを開催することができました。公益財団法人日本卓球協会副会長で国際卓球連盟副会長であります前原正浩さん、2007年から2015年までのワールドカップ３大会連続出場の大野均さん、それから、インドアバレーボールの北京オリンピック代表であり、来年の東京ビーチバレーの強化指定選手である石島雄介さん、それからハイパフォーマンススポーツセンター、国立スポーツ科学センター長で本学の文学部の教授である久木留毅さんという、錚々たるシンポジストをお招きすることができました。そして何よりも、司会を引き受けていただきました長野智子さん。ご存知だと思いますが、TVのキャスターを務め、本学の文学部ジャーナリスト学科の特任教授をやっていらっしゃいます。私は昨日も報道ステーションを見てまいりました。その時に、長野さんがキャスターをしていらした時代を思い出しました。長野さん、今度の日曜日からサンデースポーツも見させていただきます。ところで、話は変わります。皆さんは、オーストリアのピーター・ドラッカーという著名な経営学者をご存知だと思います。彼がその著書の中でこういう話をしています。「歴史では数百年に一度際立った転換が起こる。世界の歴史は境界を越える。そして数十年かけて社会はその準備をする。世界観を変え、価値観を変え、社会問題を変え、政治問題を変え、そして技術と芸術を変え、機関を変えていく。やがて50年後、新しい世界を迎える」。いま、日本のスポーツ界、世界のスポーツ界は変換期に入っていると私は思います。今回のシンポジウム、「日本基準から世界基準へ」は、まさに日本のスポーツ界の将来を展望するにふさわしいタイトルであり、また内容になることを確信しています。

最後になりますが、学生の皆さん、今回のシンポジウム、これは皆さん方がそれぞれの専門分野を持って世界に羽ばたいていくための良い機会であり、貴重な時間だと思います。ぜひシンポジウムを聞いて、いろいろな多くの刺激を受けてください。そして皆さんが卒業し、日本基準で

開会の挨拶：佐竹弘靖研究所長

はなく、世界基準の持ち主として飛躍することを願って止みません。

本日、シンポジストになられている先生方、そして司会の長野さん、どうぞよろしくお願いいたします。これをもちまして、私のご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

**飯田**　それでは、いまご紹介いただいた方々のイメージビデオを作成しましたので、ぜひ一度見ていただきたいと思います。よろしくお願いします。

（映像）

**飯田**　ここからは素人の私が司会をすると学生さんも退屈だと思いますので、プロの手にバトンを渡したいと思います。では長野さん、よろしくお願いいたします。